

読み手を意識した新聞作り

指定校 2 年次 松本市立山辺小学校 齋藤 文男

授業者 檜原 葉子 教諭

I 本校の新聞活用(NIE)の現状

松本市立山辺小学校には、素直で元気いっぱい外で遊んだり額に汗して働いたりすることができ、与えられた課題には一生懸命取り組もうとする子どもが多い。一方、自分から進んで課題をもったり進んで考えを発表したりすることが苦手である。このため先生たちは、授業での話し合いをもっと活発にできないか、と悩んできた。

一方、当時の新聞活用の現状はどうかというと、他校の例にもれず、新聞を開くといえばテレビ欄かスポーツ欄で、新聞を読む習慣がほとんどない子どもたちと、新聞の活用が叫ばれながらも「教材研究の時間不足」「新聞活用の時間の確保が難しい」という教師たちであった。

そんな中であって、平成 22 年国語の授業をきっかけに新聞スクラップを始めた 5 年生（当時）のクラスがあった。週に一つの好きな記事を見つけてノートに貼り、その記事の内容をまとめたり、感想を書いたりして担任の先生に提出したのである。この活動が半年経過し、朝の会で、どんな記事を選んだのか一人ひとりが発表し、互いに意見を交換し合うようになった。

この変化をきっかけに、先生たちは、子どもたちが少しでも新聞を開く機会をつくろうと考え、新聞スクラップブックを 4 つのクラスに配布した。更に新聞に対する興味関心を高めるために、さまざまな授業において従来の教材とともに新聞そのものや新聞記事を積極的に取り入れていこうと考えた。

「これまで本校では、これからの時代を生き抜いていくために、自ら考え、自ら学ぶ力の育成には力を注いできたものの、社会と向き合い、自分の状況を把握して、これからの行為を考える経験を十分させてこなかったのではないかと。そこで、社会と向き合う第一歩として新聞に取り組むのはどうだろうか考えた」と、時を振り返り、伊藤茂研究主任は語る。

そんな中、平成 23 年度から、長野県新聞活用教育（NIE）推進協議会から指定を受け、実践を積み重ねてきた。昨年度「新聞を理解する」授業を進めてきたのに対し、本年度は「新聞で表現する」授業を試みてきた。

まず新聞に親しませる、そのために新聞記事のスクラップをしたり各教科において教材として新聞を積極的に取り入れたりしてみる。更に新聞に親しんでいるクラスを窓口として活動を広げていこう…こうして本校の NIE の実践がスタートした。

2011 年度研究については『2011 年度 NIE 長野県実践報告書』（2012 長野県新聞活用教育(NIE)推進協議会事務局編）に詳細が掲載されているので、参照してほしい。



新聞に親しむ6年生(当時)

II 実践のねらい

- 1 子ども達にコミュニケーション能力を育成する。(本年度は読み手への意識の育成)
- 2 新聞を活用した授業の普及を図る。
- 3 研究の効率化の方向を探る。

■ 1 コミュニケーション能力の育成

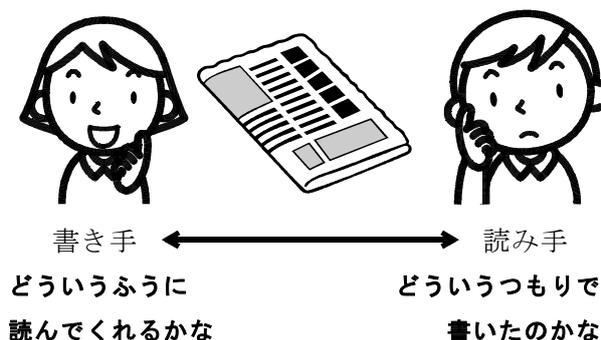
新聞は、情報を伝達するためのツールである。

伝えられる情報は、リード文や記事等、文章としての情報だけではない。文字の大きさ、字体、反転や網掛け等の文字飾り、色、あるいは写真や図表などの文字以外の情報、そしてそれらを統合する紙面構成等、様々な要素が組み合わさってメッセージが伝えられている。これを正確に読み取り、情報を再構成する力は、PISA 型学力に求められているものの一つであることは言うまでもない。

2011 年度研究では、見出しの隠された商業紙の記事を読んで、そこに込められた情報を自分なりに再構築するという授業であった。この実践の中で、見出し文を考える中で子ども達は書き手を意識していった。

情報を受信する側は発信する側を意識し、
発信する側もまた受信する側を意識するこ
とは、コミュニケーションの基本である。

ただ情報を発信し、受信するのではなく、相手の立場に立って情報を交換していく子どもの育成を願い、本年度研究では、新聞を作ることを通し、読み手を意識した情報発信者の育成を考えた。



■ 2 新聞を活用した授業の普及

研究の指定を受けると、実践発表をする学級・学年はそれなりに成果が上がるが、それ以外の学級は無関心であったり、あるいは、その発表年度は盛り上がるがそれ以降には繋がらない…というのでは、(その学級の子ども達にとっては有効ではあったが) 学校の特色あるいは全体への学力の底上げには繋がらない。

そこで、本年度は全校児童が新聞に親しみをもてるような環境を作ることを考えた。

■ 3 研究の効率化

現在、教職員は多忙を極めている。忙しさとは、仕事量と時間との相関の中で生じる感覚である。それは単純に仕事量が増えれば強く感じられるというものではなく、必要感や義務感・使命感等とも関係している。

本研究では、勤務時間が固定されているという理由から、研究会の時間を定数と考え、仕事量を軽減することを考えた。具体的には、「NIE をやったおかげで手間が省け、簡単に成果があがった」という感覚を持てるような研究にしようと考えた。

III 研究の概要

■ 1 キャンプ新聞をつくって、まとめの時間を節約しよう

一学期の半ば…「6月14日・15日にはキャンプがある。29日には音楽会。そのために放課後は忙しい。そんな中で公開授業をしなければいけないなんて…。いったい何をしたらいいの…。」NIEの研究授業で指導案を立案し実際に授業をしなければならない檜原葉子教諭はプレッシャーに悩んでいた。

「新聞は、伝えたいことをわかりやすく伝えるためのツール。このテクニックを表現力の向上につなげることはできない？」退勤時間をとくに過ぎた職員室の中で、このアイデアを出したのは、2011年度の授業者塚平麻紀子教諭であった。

檜原教諭が1番気になっているキャンプは、特別活動の中の学校行事である。しかしこの活動には、キャンプに行く準備にかかる時間や帰ってからのまとめの時間は含まれていない。これらはすべて特別活動の中の学級活動の時間（週1時間）や総合的な学習の時間（週2時間）の中で行われる。

キャンプに行くためには、班分けや係決め、夕食のメニューを決めたり、日程を理解したり、しお리를作ったり…10時間以上もの時間がかかる。キャンプに行くまでに多くの時間を使い尽くしてしまうので、まとめの時間はなかなかできないのが現状である。

手書きのオフセット印刷にして文集をまとめる場合は、書き方を説明して1時間くらい授業で扱い、家庭学習で完成させるのが一般的だ。当然子どもによって出来不出来の差が大きくなる。簡単にしおりの最後に感想を書かせ、それでまとめとってしまうこともある。

新聞づくりを利用して、キャンプのまとめの学習をすれば、前から気になっていた表現力も身につくんじゃないか…これが塚平教諭の言いたかったことだ。

■ 2 外部講師を招聘して、仕事量を軽減しよう

新聞の読み手は、子ども達の気持ちを考え、4年生にキャンプの様子などを伝えていこうということになった。

では、どのような新聞を、どのように作らせるのか。4年生の国語の時間で学んだ壁新聞にするのか？用紙はどうするのか？割り付けの指導は？

……これらを一つ一つ考え、授業として成立させていくのは、教材研究の醍醐味であるが、その余裕はない。

そこで長野県NIE推進協議会でやっている、講師派遣事業を活用することとした。これは誰でも利用できる制度である。これによって、授業者の負担軽減を図った。（右表参照。）

1学期の研究推進日程(毎週月曜日)

- 4月9日 ①本年度の研究の方向の確認
- 4月16日 ②本年度公開授業日程及び方向の検討
- 4月23日 (振り替え休業)
- 5月7日 (家庭訪問)
- 5月14日 (家庭訪問)
- 5月21日 (6年休業日・教育課程打ち合わせ)
- 5月28日 ③本単元の方向検討
- 6月4日 ④単元展開・本時の位置検討(6月5日出前授業①)
- 6月11日 (社会科研究授業事前審議)
- 6月19日 ⑤指導案検討(出前授業②)※
- 6月25日 ⑥指導案検討
- 7月2日 ⑦指導案事前審議
- 7月9日 ⑧公開授業前日準備(公開は10日)
- 7月17日 (参観日)
- 7月23日 (学級事務の日)

※6月19日は火曜日。6月18日がキャンプに伴う5年生休業日のため、交換した。この日は、NIE推進協議会の方も交えて研究会をもった。

※これ以外に1回、NIE推進協議会の方と研究主任・授業者とで打ち合わせを行った。

■ 3 新聞を身近に

5 [教材のポイント] NIE教育研究発表会 2012年(平成24年)7月10日 朝刊

感じてくる・その場でメモ わからないことを残さない

取材のポイント



取材のポイントを説明する山田君

感動をつたえよう

新聞が届くまで

- ①取材 現場の様子をメモしたり写真を撮ったり、関係者に話を聞いたりする。
- ②編集会議 紙面にどの記事や写真を載せるかを、話しあう。
- ③紙面編集 記事や写真の重要性を判断して見出しをつけ、取り付けをし、紙面を組む。
- ④校閲 誤字や脱字をチェックする。
- ⑤印刷 ⑥配達

※本文は「学習指導要領」に基づいて編集されたものである。NIE教育研究発表会 2012年(平成24年)7月10日 朝刊

長野県 NIE 推進協議会の講師の先生の子どもへの指導は、ノウハウとして全教師に共有してもらおうことが、今後活用していくためには必要なことであるし、研究会としての役割の一つと考えた。

一般的には、これは研究冊子に載せて共通理解を図る方法がとられる。しかし研究冊子に必要な「有効であったか否か」の検討にはなじまない内容であり、取り扱いに苦慮した。

そこで、その日に行われた講師の先生による授業を新聞の形式にまとめ、配布することとした。

そもそも、子どもが新聞に親しむ以前に、教師自身新聞に親しんでいるだろうか。職員室に新聞は置いてあるが、それを読む教師は限られている。また早くに登校し、帰宅は深夜に及ぶ教師に、家に帰って新聞をゆっくり読む時間的余裕はないのではないかと。

新聞の役割の一つに、事実を事実として伝えること

がある。その日、どんな授業が行われたか、そのポイントは何か、そのエッセンスを詰め込み効果的に伝えるツールとして、新聞という形式は適している。

そこで、教師に新聞に親んでももらい、かつ、公開授業日までにどんな授業をしたか、新聞作りの指導のポイントは何かがはっきり伝わるように、上のような新聞を発行した。

また、子ども達にも新聞に親んでももらうために、職員室廊下に、オリンピックをテーマとして毎日の記事を掲示していった。

■ 4 研究冊子・指導案をつくる

公開授業に向けて配布する主なものは、指導案が含まれた研究冊子である。

おおむね、本時授業に関わる指導案の部分は、長野県教育委員会で作成されたものに準拠しており、研究の部分は、指導案部分と関係づけられながら右のような形式の冊子が一般的に作成されている。

この形式は全国的には珍しいもので、他府県で教育実習を受けたり他府県から転任してきた教職員は、「何をどう書いていいのかまったくわからない」という感想を一樣にもつ。

平成〇年度 ○〇小学校 ○〇研究会

〇〇科学習指導案

○単元名 「□□□□」
 ○期 日 平成18年□月□日(□)
 ○指導者 長野県教育委員会 教学指導課 □□指導主事
 ○授業学級 □年□組(男子□名 女子□名 計□名)
 ○授業者 □□□□教諭

目次

- I □□グループ研究テーマ
- II テーマ設定の理由
 - 1 研究の立場
 - 2 テーマ設定の理由
 - 3 研究の方向
- III 研究内容
 - 1 (仮説1)
 - 2 (仮説2)
 - 3 …

研究仮説

IV 学習指導案

- 1 単元名
- 2 単元設定の理由
- 3 単元の目標と評価
- 4 指導上の留意点
- 5 単元の展開
- 6 本時案
 - (1) 主眼
 - (2) 本時の位置
 - (3) 指導上の留意点
 - (4) 展開
- 7 実証の観点
- 8 基礎的研究
 - (1) 生徒の研究
 - (2) 教材の研究
 - (3) 指導の研究
- 9 資料

この冊子を作成するに当たり、研究会では「本時展開の部分の語尾はどうしたらよいか」「本時のねらいの文言はこれでよいか」等々、細かな部分まで検討を加えていく。そして検討を加えるたびに執筆者は書き直しの必要が生ずるため、完成までには膨大な時間と労力がかかる。

この冊子の中心は、「このような子どもたちに」「このような手立て（指導の工夫）をとれば」「こうなるだろう」という仮説の部分である。そしてこの仮説をもとにして授業を公開するのが長野県における学校現場の一般的な研究である。

しかしNIEの場合、手立ては「新聞」に限定される。このためあえて仮説をたてなかった。そして「こうなるだろう」の部分は「国語」や「総合的な学習の時間」といった各教科・領域の身につける力をそれにあてることにした。更に「見出し語」や「リード文の5W1H」といった新聞の特徴に注目し、新聞をキーワードにすることで、より効果的・効率的な学習が成立するように工夫した。

冊子作成にあたっては、前述した新聞をまとめることにより、更に労力の軽減を図った。

■ 5 実践授業

(1) タイトル	キャンプ新聞を作ろう
(2) 単元名	新聞を作ろう
(3) 新聞活用分野	新聞制作学習
(4) 学年	5年
(5) 教科・科目	総合的な学習の時間
(6) 単元展開	

① 第1次(3時間)

- ・ キャンプへの願いをもつ。
- ・ 4年生に向けて新聞をつくることを決める。
- ・ 新聞のひみつを学ぶ。

② 第2次(7時間)

- ・ キャンプの思い出の中から伝えたいことをしぼる。
- ・ 作り方を学ぶ。
- ・ 下書きを作る。
- ・ 友達からのアドバイスを参考に、下書きに工夫をして、清書を完成させる。

③ 第3次(2時間)

- ・ 完成した新聞を読み感想を伝える。
- ・ 4年生に伝える。

(7) 本時展開及び児童の反応 (12時間扱い中第11時)

導入段階（課題設定の場面）では、自分の制作を振り返り、どんな点を工夫して新聞を仕上げたかを発表する。この中で、友達もさまざまな工夫をしたことに気づいていく。

この気持ちをもとに「友達の新聞には、どんな工夫があるのかな」という学習課題を知り、

展開段階（共同追求の場面）では、友達の新聞を読み、友達



効果的な板書

の工夫を見つけ合い、グループで意見交換をする。そして友達に指摘された自分の工夫を全体に発表する。

終末段階では、この時間に学んだことについて自己肯定感に基づく感想をもち、4年生に見せたり次の新聞作りへの期待をもつ。



さまざまな気づき

この展開の中で、新聞は、文字情報だけでなく、レイアウトやフォント、図表や写真等も含めたトータルな視覚を通した情報であることを踏まえ、さまざまな感想を出させていくよう留意した。

もともと「友達の作品を見てみたい」という気持ちは子ども達にあったが、課題設定の場面の効果的な板書により、作品を見る際の視点が明らかになり、次の段階に進むことができた。

共同追求の場面では、その子らしい評価が一人一人にあった。この時間までは、文章の内容や中身を中心とした推敲を主に行ってきたが、この時間では文章以外に目が向いていった。

最終目的である4年生への発表への期待が高まった。

(8) 本時実践の成果と課題

<成果>

- ・新聞の基本は、記事をわかりやすくすること。この基本をふまえ、そのためのビジュアル効果に気づくことができた。
- ・この基本をふまえ、相手意識をしっかりと持つという書き手意識を培うことができた。
- ・子ども達は作る楽しさを味わっていた。

<課題>

- ・ビジュアルに目が向いていたことはよいが、色の使いすぎはよくない。
- ・記事の内容が時系列が目立った。伝えたいことを効果的に表現するためには課題が残った。

IV 研究のまとめ

■ 1 読み手への意識の育成

実践された単元を通し、この学級の子ども達は常に読み手を意識して新聞を製作していった。本時授業記録からも、読み手意識の高まりは観察された。従って狙いは達成できたと考える。

■ 2 新聞を活用した授業の普及を図る。

来年度継続してNIEの公開を行いたいという申し出が職員からあったと聞く。この点から、ある程度職員へ意識が浸透してきつつあると考える。

これに伴い、各学級へ新聞が配布（寄贈）されることになった。今後の健闘を期したい。

■ 3 研究の効率化の方向を探る。

研究会効率化のために本年度行った主なことは、研究冊子に仮説を入れなかったことと、それに伴う書式の検討である。

これについて、筑摩小学校では国語の教育課程研究で実際に研究仮説をたてずに公開を行っていた。これについて、指導主事先生から、以下のようなご指導を受けた。

- ・仮説をあえて設けないのは、教師ひとりひとりが、目の前にいる子どもたちに「どういう手立てをとって授業を進めたらよいか」考え、それを通して教師ひとりひとりに力をつけて欲しいという願いから出発している。
- ・そのために、「研究会として一つの授業を提案する」ことはしない。公開された授業をもとに、「それを更にどう工夫していくか」をみんなで考えあい、それを各自の実践につなげている。研究冊子の「実践例」は、その積み重ねの記録である。
- ・仮説実証型の授業は、公開することで「仮説がどうだったか」の検証が行われ、それを元に、参加した教師ひとりひとりが次へ発展させていくことが難しい。これに対し「まず実践ありき」では、公開授業がスタートとなり、研究会では、教師ひとりひとりが、その子・その授業をどう見たか、が問われる。そして発言した教師自身が、次に自分の授業でどうするかが各自の課題となっていく。そして、そういう意識で参加する先生が増えてきつつある。
- ・そのために、研究会では「実証の観点」ではなく、授業者の「見て欲しいところ」が指導案に示される。

(傍線筆者)

これは NIE に限らず、研究授業全般に対するご指導である。「このような子ども達に」「このような指導をすれば」「こうなるだろう」という文脈の中で、NIE の場合、「新聞を活用した指導をすれば」と手立てが限定される。当然新聞をどのように活用するかが問われるのであるが、その適否を研究しようとした場合、研究の費用対効果（それを明らかにするためにかけられた時間等に対し、それに見合うだけの成果があがったかどうか）が問われてくる。

研究のための学校ではない一般校では、むしろ気楽に肩の力を抜いて、「新聞を使ってみて授業をしてみました。子どもの姿から授業はどうだったかを教えてください」という実践と、それに対応するレベルの研究でよいのではないかと考える。

V 残された課題

□新聞を更に日常的に授業に生かしていくためのシステムの構築が必要である

「版画をやるので、新聞を I 日分持ってきてください。」「先生、家は新聞をとってないので、どうしたらいいですか。コンビニで買ってきますか?」というように、各学級の中に、2～3 家庭は確実に新聞を購読していない（本校）という実態がある。新聞を日常的に授業に生かすためには、その前提として新聞を学校で購読しなくてはならない。その財源をどのように確保するか検討が必要である。

公的な財源が確保されれば、費用対効果の問題もあり、教職員としては授業に用いざるを得なくなるし、用いるためのノウハウはすでにあると考える。

また、購読したものを全校でどのように利用していくか、組織として推進するセッションが必要となると考える。

□研究を行うならば、検証可能なレベルの見極めが必要である

「読み手意識に立って紙面をつくる力が身についたか」は、完成した作品によって評価できる。また、その過程においても、授業前と授業後の子どもの意識の変容を記録等から追うことができる。この点からいって、「望む力がついたかどうか」については検証可能と言ってよい。

しかし、「コミュニケーション能力の育成」等の大きなねらいとなった場合、どのようにこれを定義し評価するのか。たとえば「少人数学級で学力がついたか」という問題について、評価が困難であることは周知の事実である。同じような大きな研究テーマを設けることは一般の学校の研究レベルでなし得ることではない。研究テーマ設定にあたって、検証可能なレベルにあらかじめ設定して研究をスタートする必要がある。

また公開授業を行っても「この先生だから」「この子ども達だから」とか、「こんな大きな単元、実際はできないよね」というような批判もある。この点からも、誰もが実践でき、誰もがその効果を期待できる、一般化・敷衍化の検証可能なレベルの研究を行う必要がある。

□教師の負担の軽減について

教師の負担（仕事）は、教師の力量と仕事にかかる時間の相関によって決定されると筆者は考えている。同じ負担でも、教師の力量が高まればかかる時間は短縮される。負担を軽減するためには、教師の力量を高めることが必要である。

そのために、本年度は、時間を定数とし、いかに負担を軽減するか（力量を高めるか）の研究を行った。そのための方法として、指導案冊子に仮説を用いないことや、外部講師を招聘する等の方策をとった。

仮説を用いないことについては、前述のように筑摩小学校の実践や県教育委員会指導主事の指導もある。この指導を生かした研究を進めてほしい。